

常照

第 863 号

仏さまは極悪人でも

救ってくれるのですか？

— 質問 —

阿弥陀如来は「選ばない、嫌わない、見捨てない仏さま」とありますが、どんな極悪人でも救ってくれるのでしょうか？「悪いことをしたら地獄に落ちる」と小さい頃にいわれていたので、仏さまもその人の生き様で、救う人を選ぶのかと思っていましたが、どういうことなのでしょう？

— 答え —

一口に仏さまといっても、いろいろな仏さまがおられます。

浄土真宗の仏さま〈「本尊」〉は〈阿弥陀如来〉です。

阿弥陀如来という仏さまは「どんな人でも救いたい」という願いを持ち「どんな人でも一回でも念仏〈南無阿弥陀仏〉を称えたら必ず救う」という誓い〈本願〉をたてられた仏さまなのです。

その救済の対象には限りがありません。どんな悪人でも救いたいという仏さまなのです。ただここでいう悪人とは悪を造ってしか生きていけない者という意味です。つまりその悪人は誰か？といったら悪人とは自分〈私〉のこととなります。「あいつは悪だ」と他の人のことをいう言葉ではない、というのがまず大切なことです。

悪人正機（あくにんしょうき）

そもそも阿弥陀如来がどうして願いと誓いを立てたのかといえば、どうしても修行したり、良い行いを積み重ねたり（善行）することが自分の力ではできない人（私）がいるからなのです。自分の力ではさとれない人を、救わずにはおれない、という阿弥陀如来のお心なのです。私たちは悪を造るつもりがなくても、悪を作らざるをえない、罪を犯さざるをえない、のが人間（私）であるということです。善い行いをしよう、と思っても、思うままに善行を積むことができない者も悪人ですね。

私たちは日々悪を造っている自覚はないと思います。しかし、例えば何気

なく生活をしていても環境を破壊したり、毎日私たちは、鳥や豚や牛や魚やいろいろな命をいただいて生きています。そうしてしか生きていけないのですし、時にはそのことが当たり前になり感謝する心すら無くしているのが私たちの生活のありようです。その中に本当に深い意味で罪はないのか・・・
仏教の人間観はそこまで深く人間存在を見つめています。

状況によって何をするか分からなかったり、悲しいことがあってもすぐに忘れてしまったりするような私たちの在り方には、深い意味での悪が含まれているということです。

不断煩惱得涅槃

(ふだんぼんのうとくねはん)

そういう視点からすれば、「悪いことをしてもオッケー」というのは浅い人間観から発せられた言葉だといえるのではないでしょう。悪を犯さざるを得ないのだから、思うままに振舞い、平気で悪を積み重ねていいということにはなりません。

これはある先輩の住職に聞いた話ですが、ある若い僧侶が、浄土真宗の教え、阿弥陀如来の話を聞いて次のようにいったそうです。「どんなあなたでも救うと聞いたとき、今の自分のままでいいのか?という問いが起こってきた」。「どんなあなたでも見捨てない」とい

う仏さまの教えに出遭ったとき、その言葉が本当に自分の問題として響いたとき、自分の生き方が問題になってくると思うのです。悪を造ってしか生きていけなかったり、生きていることが当たり前になって、おごったりして暮らしている私たちです。しかし、そのことを悲しみ、私を救いたい、と願ってくださっている仏さまの言葉に触れるとき、少しずつでも自分を見つめ、自分の生き方を教えに聞きつつ、教えに照らして問い直されて生きていく、という方向性も生まれてくるのかもしれないと思うのです。

煩惱(身心を悩まし煩わせる心のはたらき)があるからこそ、教えに導かれて、教えを聞いていかなんといけな、というのが浄土真宗の立場です。

「煩惱を断ち切ること」ができなくて
も「煩惱に振り回されずに生きること」
は成り立つのです。それは、煩惱に振
り回されて生きるのではなく、仏さま
の教えを鏡として、教えられながら生
きていくということです。煩惱を断て
ないからこそ、教えに導かれて、教え
に聞きながら生きていくべき自分だっ
たと、自分の姿を教えられるのです。
煩惱に迷っている自分を知らされるか
らこそ、いよいよ教えを聞いていく、
教えに尋ねていくという生き方が開か
れてくるのだと思うのです。



発行所

☎047-0017

小樽市若松一丁目四番十七号
本願寺小樽別院

電話 二二一〇七四四番
FAX (〇一三四) 二二九一四〇八〇番
テレホン法話 二七一一六一六番

ふみはずし

ましたが

気がつけば

こども

仏の道でござい

ました